

ソウソウ



さわさわ

11号

重信房子さんを支える会 (関西)

手を引きて子を送り来るママたちの笑顔溢る朝の園庭

森本忠紀

このところ、ぼくの朝は感動から始まります。幼稚園年長組（星組という名がつけられています。）に通う次女を送っていくと、ちょうど、8時半ごろですが、園児とママがいっせいに登園して来ます。元気な子供たち、そしてにこやかに笑みを交わす若いママたちは皆優しさに満ち溢れています。女性ならではの、明るく美しい光景は何度見ても感動し、飽きることはありません。

私は四十歳の頃に結婚に失敗して離婚してからはもう二度と結婚はすまい、独身を通そうと決めておりました。それが、どのような運命のいたずらか、あるいは、神の計らいというべきか、五十五歳で再婚いたしまして、二人の娘を賜りました。長女は小学校に通い四年生です。そして次女が今年幼稚園、二年目となっております。つい先日、保育参観があり、子供たちが、砂場遊びや泥団子を作って遊ぶのを親も一緒になって楽しんだ後、一室に楕円形に着席して、クラス懇談会がありました。二十余名全員が、自己紹介を兼ねて幼稚園と家庭でのわが子の様子やそれにまつわる思いや感想を述べられました。みなさん何と愛情一杯であることか、またまた感動いたしました。わが子を語るお母さん方の奥ゆかしくも慈しみ深い表情に接すると、今が人生で一番美しく輝いている時かも知れないと思ってしまう。皆さん惜しみなく愛情を注いでいらっしゃるもの。「年少のときは幼稚園へ行くのが嫌だとよく泣いたものですが、年長になってからは楽しい、早く行きたいと言って喜んで出かけます。」「幼稚園でこんなことをした、こんなことがあったといっぱい喋ってくれます。」「一番下なので、弟がほしいと言ってたのですが、幼稚園の給食当番で年少さんのお世話をするのが楽しくて仕様がないらしいです。」「幼稚園ではとても熱心にお片づけをするのに家では全然やってくれません」ありのまま語られる日常が何と鮮やかで興味つきない一コマであることでしょう。

お母さん方一人一人姿形はみなちがいます。けれども、この場では、そんなものを超越して、どのお母さんもみな、とてもきれいで魅力的です。



さわさわ

【さわ】…「共に」「一緒に」を意味するアラビア語です。“さわ”一語でその意味がありますが、“さわさわ”と続けて言う言い方もよくされるそうです。語感がいいので、会報タイトルには“さわさわ”をいただいております。

ぐるりと輪をなしている、豊穡感は何にも比べがたく、ぼくの下手な短歌ではとても表現しきれず、申し訳なく思います。

参観日その幼な子を語りつつ慈しみ深きママの笑顔よ

こんなささやかで美しい、あの、スマップの「世界に一つだけの花」そのままの世界のような小社会が成り立っているなんてまるで奇跡に出会った気がしたものです。ぼくは今年度PTAの会長をやらせてもらっているので、幼稚園のPTAの活動も経験させていただいていますが、役員の皆さんの協力し合う姿がすばらしい。すべて、対等、平等で、押し付けや強制がなく、非暴力、平和そのもののチームワークをぼくはとても美しいと感動します。ぼくたちが生きる現実の社会はちょうど対極にあります。力がものを言い、人間関係は上下関係によって成り立ち、支配、抑圧ががんじがらめに人を縛り、およそ平和に反しております。

そして悲しいのは、幼稚園のような平和な社会はそれ自体、外部社会の暴力に対してはとても無力で、壊されやすいということ。また、お母さんの子供への愛もいつまでも変わらないというわけにはいかないでしょう。そうであるが故にぼくは、この幼稚園の平和を守りたいと思います。守ると言っても、これまた無力なこのぼくが、どうやって？と聞かれたら困りますが、やはり守りたい。そして、このような幼稚園生活が後の長い人生を生きていく故郷になったらいいなと祈らずにはおれません。

「敵に侵略されたらどうやって国を守る？」という議論をする人がたまにいますが、ぼくにとって守るとは、平和を守る、愛する者を守るということを意味します。幼稚園の平和を守るのと同じことで、祈りです。星組のセイチ君は、いつもママと一緒に風呂に入って、幼稚園で習った「ある日、森の中、クマさんに出合った。」の歌をママと二人で歌うのが大好きだそうです。それも輪唱で歌おうとセイチ君がリードします。セイチ君が先に歌うのと後になるのと二つのバージョンを必ず歌うということです。輪唱はバッチリ決まっているに違いありません。セイチ君が大人になってもこの二人はきっとすばらしい親子関係を築くことでしょう。

私のはたち代

重信房子

三、大学時代—65年

1 大学生生活

大学に入って、私が当初もっとも興味を持ったのは、文学研究部と雄弁部でした。文学研究部は、私自身高校時代には、文芸部で、短篇や詩、作文などを書いていたし、キックマンに入社してからもその気持ちが残っていました。千葉の本社の、野田の鎌倉さんという社員を中心に文芸誌「野田文学」を発行しているのに参加していたので、その延長上に興味をもっていました。史学科なので小学校の先生か歴史の先生になり、歴史上の人物で悪者とかいわれている人々に実は、悪者ではなかったのではないかと、とか、歴史の敗者を、公正に浮かび上がらせるような小説を書いてみたい。そんな思いもあって、文学研究部略称「文研」に入りました。このサークルの人たちは、ほとんど進歩的ながらノンポリで、いわゆる日共・反日共の政治活動には興味を示さず、もっぱら、純文学中心の系譜のようでした。文研の顧問は阿部知二教授だったと思います。当時、倉橋由美子が『パルタイ』で、明大の新聞に入選し、その後、芥川賞を獲ったことから、それに続こうとする気概があったし、かなりの書き手が何人もいるようでした。

明大には、本多秋五や舟橋誠一なども教授陣にいたし、近代文学の戦後の主体性論争とか「近代の超克」とか「文学における戦争責任」など講義や討論や小林秀雄論など、それぞれが、分科会で、学習研究していました。各々が作品を書いては、その作品の品評を行い又、「駿台派」という文研の同人雑誌を発行していました。私は、高校時代『橋のない川』を読んで、こんな世界が日本にあったのか...と差別支配に大きな驚きを受けて以来、高校では、差別とか人間の葛藤を子供の目線から、いくつか、短編を書いてきていました。それで、そんな作品からまず書き始めてみたかったのですが、文研は、そういう児童文学の雰囲気はありませんでした。丁度、新聞で児童文学「こまの会」というものの会合が、水道橋辺りであると知って、どんなものか行ってみたことがありました

が、失望しました。身内の人々らしいわけのわからない会話を交わしながら、煙草の煙もうもうとする中で、児童文学に関する話は、一向、出てこなかった為です。それで、何だか十八歳の私は、場を失って恥ずかしくってそれっきりでした。それで、当面は詩を書くことにしました。高校時代に、書いていた延長上のものですが、情念を言葉に置き換えてみたかったからです。後に65年、明大新聞に一年生の時、短編で応募したこともありました。『くちなわの声』という小説です。本当にあった話ですが、日韓闘争のデモで、国会前に座り込んだ時のエピソードです。スクラムの隣にいたはずの友人が機動隊のごぼう抜きの実力行使が直ぐそばに迫った時、居なくなっていました。後に、彼は被爆者で、白血病だと告白し、血が止らなかつたらどうしようと、怖くなったと話してくれました。その時のことを書いたのです。

阿部知二教授から、書き直して持ってくるようにと、幾つか指摘されましたが、そのままにしました。才能もないのに、何かそこまで熱中して短編を書き上げる気持ちが失せてしまったようです。中途半端でした。

2. 雄弁部

それからもう一つは雄弁部でした。私は、雄弁を好きだったわけではなかったのです。それでも小学校時代ラジオを聞きながら、好きだった秋山ちえ子さんみたいに自分の考えを人に語れる人がいいなと思っていました。弁論で、人を感動させることにだんだん興味を持ちました。私が弁論をやるようになったのは、姉の影響です。

中学時代、二つ年上だった姉は、私が入学すると中学三年でした。生徒会長で活発な人で、中学を代表して、弁論大会にあちこち、先生に引っ張り出されていました。朝礼でもよく表彰されていました。姉の中学時代のクラスメイトには加藤登紀子がいたが、後によく、「すみちゃん（姉のこと）がおとなしくなって私たちがこんなことになるなんてねえ」と大学時代、歌手になった自分と学生運動で忙しい私と姉をくらべて言ったものでした。当時の姉は、学校の名物のような人だったと思います。その姉のお

かげで中学に入って直ぐ、「お姉さんが出来るから、あなたもやれるでしょう」と、あれこれ、生徒会だ、演芸だ、弁論だ、と引っ張り出されそうになって、私はいつも逃げまわっていました。高校になって、一年生の時、弁論大会で「学生の特権について」の題で弁論大会のクラス代表の役を指名されてしまいました。やりだしたらおもしろかったか高校三年生の時、姉に論旨を書いてもらい丸暗記して、優勝したことがありました。自分で「青年の主張」に応募し、東京都で入賞したことがありました。

その延長で、大学でも雄弁をやってみたいと思って部室を覗いてみました。ところがこの、明大雄弁部はマッショの溜り場のようなところでした。当時、何処の大学雄弁部も同じだったのですが、政治家を目指す人々の集まりのようでした。政治家になる為の、演説の弁論、しかも、マイクを使わない地声の、明治時代の演説会を思わせるパンカラです。良く声を通るように発声練習などをしていて、女性の部員は一人も居なかったのがっかりでした。しかし、当時は、大学の弁論部は、各大学、全国の弁論大会があるので、同期の交流もあります。各地の選挙運動に呼ばれるし、弁論部は引く手数多のアルバイトの出来るところでもありました。

私は入学して半年ぐらだったか、インド大使館主催のネール記念杯に応募しました。論文審査を一番で通り、弁論大会に臨みました。早大隈講堂で決勝大会が行なわれました。「ネールとガンジーの非暴力による変革」が私の論旨でした。会場一杯に、早大生を中心に人々は溢れかえっていました。気がついたらマイクのない旧来の雄弁方法の大会でした。私は、声が低く、アルトで、マイクがないと遠くまで届きません。発声練習もしていないので、論旨はよくても、弁論で一番にはなれませんでした。私の弁論を野次った人が「野次賞」を獲りました。「ディスクジョッキーじゃないぞ！」という野次だったのを憶えています。

私が、このネール記念杯に参加したのは、優勝がインド招待だったので、インドに行ってみたいという思いからでした。ガンジーを読み「非暴力の変革」を貫いた姿勢に共感した為にその「非暴力による変革」を論旨としたものです。

当時は、大学弁論部には、東京でも女性がほとんど居なかったの、ネール杯以来あちこちから、何処で聞きつけたのか、明大雄弁部に、私への選挙のアルバイトが舞い込んできました。各地の選挙の為の“ウグイス嬢”とか“女弁士”のアルバイトです。私も神奈川・福島・町田など興味津々で、他の大学の雄弁部員と競い合って演説したものです。不思議なもので、事務所に行って話を聞くと、この候補者は落ちるだろうというのは、直ぐにわかります。それでも、高額（当時でも一日2万円以上）で引き受けるのです。その候補者の取り得や略歴を聞いて、それから演説用の短い論旨を三つか四つ練り上げて、候補者にくっついて車に乗ります。駅前とか団地で、車を停めて降りると、私たち弁士は、数人のサクラの聴衆を始まりとして、より多くの聴衆を集める為に熱弁を振るうのです。準備した論旨を頭に叩き込んでいて、臨機応変に、幾つかのバージョンを切々と語り、そして、候補者を紹介します。候補者をたてるのもなかなか難しい。もうこれは、望みないなどと判る場合でも、アルバイトの雄弁部の学生同士では、どっちの応援演説が聴衆を集めるかとか、どっちの話が団地の窓を多く開けさせるかとか、競い合うのです。夜、私たちの演説が始まると、明かりの点いた団地の窓が、がらりと開いて聞いてくれるのです。その為に、訓話とか、歴史話とか、聞き耳をたてたくなるように話を続け、最後に候補者を持ち上げる方法を使いました。私も、早大や中大の雄弁部の弁士と何度も、団地の窓を開けさせる演説競争を楽しんだものでした。

そんな楽しいアルバイトは、私がキッコーマンを2年程勤めて辞めてからでしたから、66年くらいからだったと思います。66年、20歳の時、町田で“私は二十歳になりました。初めての選挙です。二十歳の私の投票したい人を見てください”と友人の父親の応援演説をやっていました。

3. 婚約

この弁論活動を通して、65年から66年にかけて、私はある大学の弁論仲間と結婚しようと約束しました。ある時、外国に行っていた彼が帰国するのを羽田で待っていた時のことです。たまたま隣で雑談していた、地方から息子を迎えに出てきた田舎のおじさん風の紳士が、偶然、彼の父親

だったのです。彼が、通関して来合わせて、父親と知ったのですが、父親は地方の自民党のボスでした。私のことを、“政治家の妻に相応しい。直ぐに手をつけろ。貧乏人でも素性はかまわん”と言って、当時、定宿にしていたホテルに部屋をとったというのを、息子である、誠実で真面目な彼から聞きました。それを聞いて、無礼千万とカンカンに怒って私は、帰ったのですが、それが又、その自民党ボスの父に気に入られてしまったようでした。そんなことを経て、二人の間では婚約することにしました。

「世の中を良くしたい、日本をかえて、もっとよい社会にしたい」。それは、父と語り合った私の願いであり又、政治家を目指す彼も、共通の願いでした。この65年の頃には、ガンジーを語るように私には、変革の方法はあまり分からなかったし、左翼的に物事を考えていたわけではなかったのです。フィアンセと日本をより良くすることをお互いに語り合い、父親が来ると一緒に河野一郎だったか、派閥のボスの屋敷にもついて行ったこともありました。

学費闘争が66年に始まると、だんだん「世の中を良くする」方法や実現の仕方において二人の間に、埋めがたい溝が出来たように感じました。私は自民党内の変革では貧しい人々は救われることはないと思いました。大学で先輩たちから習い始めた「階級」や「革命」をリアルに実感し始めていました。彼は、寛大にも、私に自分の信ずる道をすすむことに賛成だと言いました。「でも日本は、暴力革命も受け付けないし、自民党の改革以外に変化は、あり得ない」と主張していました。彼は、金持ちだったから根源的な貧しさを分かっていないなあ...そんな思いで距離が出来ていくようになった。婚約者としては、会う度に論争し、論争する度に、私には、よりラジカルな革命こそ求められていると、思いを深くするようになりました。後に、こうして婚約を一方的に私の方は取り止めてしまいました。彼は、「君が、今の左翼的やり方では、日本を良くすることは出来ないと考え直して、戻ってくるまで、待っているよ」と、笑っていました。

後に彼は父親を継いで政治家となり、国会議員になりました。2000年に逮捕された時、何処で聞きつけたのか、検察は、ある国会議員の名を

あげて、婚約者だっただろう、と聞いていました。とにかく雄弁部の世界は、政治家に繋がる世界で、それも又、楽しい世界でした。

4.デモ

文研と弁論、加えてクラス討論や夜学連のメンバー（夜学連というのは夜間大学の学生自治会の連合らしく、昼間部の全学連と違って、働く学生たちの自治や改善、連帯の為の研究サークルのようだった）と社会や世界を語り大学の学問の自由や自治を語ることが生きている実感のように楽しいものでした。そんな中から、ベトナム戦争に反対して、初めてベ平連のデモに参加しました。65年5月か6月くらいだったと思います。芝公園に向かって、何処かの公園から歩き出して、小田実らがハンドマイクで「アメリカは北爆をやめろ！」と叫んで、歩くという初のデモ参加でした。芝公園で、短い集会をやって解散しました。

デモの間中、まだ10代の若い私ともう一人の女子学生に話しかけ、アメリカの北爆の様子を語ってくれたのは、前回書きましたがいいかも、という人でした。それから後、日韓条約反対のデモが激しくなり、文学部自治会に誘われて、国会に向けたデモにも参加しました。国会通用門のところに座り込み、国際学連やインターやワルシャワ労働歌を歌いながら、お互いに地面に座ってスクラムを組んで、ごぼう抜きに抵抗していました。

「斎藤君！都学連委員長の斎藤君、君ら学生たちの行為は違法です。直ちに解散しなさい。解散し、引き揚げない場合には、実力を行使します。」

投光機が放射状にデモ隊を焦点に光を投げかけると、夕暮れの暗闇に浮かび上がった都学連委員長の斎藤君（明大・66年初代再建全学連委員長、後に明大学費闘争のボス交によって失脚した）が、当時の公開録音のプロデューサーのように、右手を振り上げてまわし、抗議の仕草で合図をすると、何百人～千人位の座り込みの学生部隊が呼応します。「ナンセンス！我々は闘うぞ！」と、機動隊に向かって叫ぶのです。荘厳でした。その野外劇場のような情景に圧倒されます。

そのうちに、「これから君たちを排除します！」と、警察は宣言すると、座り込みの私達は、ぎゅっとスクラムを組んで互いに繋がっている隊列を、

さらに強く握り合います。そこへ、機動隊が、牛蒡（ゴボウ）抜きのように引き剥がしながら排除していくのです。引き剥がすと二人の機動隊員が、一人ひとりの両腕を捕って100メートルほど先の三宅坂の交差点の方に連行し、そこで放します。私たちは、又、知らない者たちとスクラムを組み反撃しようとしてデモの隊列を組む、というイタチごっこが続くのです。そんな風に、日韓条約批准の頃まで、盛んに闘ったものです。

当時は、捕まることは無かったし、直ぐ釈放されました。指導者が捕まっても数日で、直ぐに出てくるのが常識であったのです。社会党・共産党・国鉄労働者・日教組など、大勢のデモが、国会での論戦とあわせて院外でも、盛んに繰り広げられていました。権力側も、そうした反体制運動の総体の一翼として学生たちへの弾圧にも、無茶は出来なかったのです。今の、デモやピラ配り、落書きへの警備弾圧はひどい警察国家の姿を示しています。

5.初めての学生大会

入学後、65年6月か7月か、明大全学自治会の学苑会の学生大会が開かれることになりました。日共系学苑会執行部の人たちがクラスにクラス委員を選んで、大会への参加を呼びかけるようになりました。そうすると、一方、反日共系の方は、この日共系の学苑会は“正統性を失っており、ボイコットすべきだ”と主張し、ピラを撒いていました。文学部自治会としては、大会をボイコットするようにと、クラスに呼びかけています。両方が、授業の合間に教室に来てはオルグ合戦し、かち遭っては論争しています。それをみていて、私たち入学して間もないクラス日本史科としては、どうするか話し合いました。そして今回は、代議員を大会に出すことはやめて、出来るだけ多くの人が大会にオブザーバーとして参加することにしよう、と決めたのです。そんなわけで、50人ほどのクラスの8割くらいがオブザーバー席に参加して、大会の成り行きを見守ることにりました。

大会が始まり、資格審査委員が参加代議員を読み上げて大会の成立を告げました。ところが、私たちのクラスでは、今回代議員は出さず、オブザーバー参加と決めたのに、日本史科の代議員としてクラスのSさんが座っ

ていました。彼女は、高校時代から民青だと語っていて、学生大会への参加を強く主張していた女性です。この一件が、私は日共の友だちに対して批判的になり、反日共系に肩入れしていく出発点となりました。

大会成立を告げる議長に、「意義あり！」と挙手をして、私は発言を求めました。オブザーバー席に、白い帽子を被り白い手袋に、紺に白の水玉のワンピースの見かけない女の子が手を挙げたので、思わず議長は私を指しました。当時は、キッコーマン入社スタイルの御洒落な出で立ちのまま、大学に通っていました。オブザーバー席から、20メートル以上ある階段教室の大会場の前までやっと、辿りついてマイクの前に立ちました。そして、私のクラスでは今大会には、代議員を出さずにオブザーバーとして参加すると決めた。そして今日本史科のほぼ全員がオブザーバー席に居る。にもかかわらず、Sさんが、1年日本史科の代議員となって座っているのは不当であり違法だと訴えました。私の発言の趣旨がわかりはじめたところで、「うるせーこのガキ！」と野次が飛び「トロッキスト！」と罵声が飛んだのには吃驚しました。「貴方たちは人の話も聞けないのですか?!」とやり返しているうちに、今度は、オブザーバー席にいた反日共系の学生たちが待ってましたとばかり、一挙に壇上に駆け上がりました。そして議長や壇上の日共系の学苑会高橋委員長以下を殴りつけました。その上、「シュプレヒコール！この大会は不当だ！」「デッチあげ大会粉碎！」などと叫びます。スクラムを組んで、「ああインターナショナル」とインターを気分よく歌い上げると、スクラムを組んでデモ行進しながら退場してしまいました。私たち一年生はあつけにとられていました。倒れていた日共系の高橋委員長はマイクをとり「学友の皆さん、見ましたか！これが暴力集団トロッキストの正体です。さあ、民主的な我々のもてで大会を続けましょう」と、呼びかけると、「異議ナシ」の合唱のもとに、学生大会は議事進行し、スムーズに日共系の議案と人事を採択して、終わってしまいました。

何のことはない。大人と子供の勝負みたいなものだったのです。私は日共系の誤魔化しはまったく許せない欺瞞だと思いました。同時に、反日共

系の自己満足的なやり方では、まったく学生を結集させられないと思いました。ちゃんと計画を立てて、日共系から秩序に則って、学苑会を取り戻すことを考えるべきだと思いました。先輩たちにそう言ったのですが、そんなことは無理だと一喝されました。そうかな、でもやってみる価値はある。そんなに難しいことはないと思う。この一年生の時の、学生大会における日共の誤魔化しが、私を反日共に追いやりました。そして、学苑会を日共系から奪回する為に、数年かけてもやってみようと思うようになったわけです。勿論それだけを目的にしたわけではなかったけれど、日共からの奪回を目指しはじめました。

頼まれてやり始めた文学部の自治会の執行部はやめて、文研から出向する形で研究部連合会執行部に加わろうと思いました。ここなら、各サークルをオルグして文学部以外とも協力して日共との論争をも全校的に行えるからです。

6 研連執行部として

研究部連合会、通称「研連」は、もう幾つのサークルがあったか忘れたが、20以上のサークルがあったと思います。大学側からか自治会費からか、助成金が出て、研連執行部が予算を管理配分し、研連の活動の自治を保証していました。反日共系の人たちは、この研連は、民青の牙城だと言っていたが、実際、研連の執行部に加わってみると、日共系の方は、執行部の半分くらいのものでした。それも「ゴリ民」というより、日共シンパのような人たちだったのです。

研連として、活動にもっとも必要なことはサークル活動の保証とサークル相互の支援を強化することなど、当たり前のテーマで活動していくと、日共も反日共もない、皆友好的な仲間でした。そんなに、日共系の人が多くないと判ったと同時に、政治研究部や近代経済研究部などには、社会党系とか学内の反日共系とは一線を画して昼間は労働しながら、職場で組合運動や活動している人たちも、多々いるのが分かりました。そして、日共批判の理論的研究をしている仲間がいるのも分かってきました。

そうしているうちに、66年、明大でも早大に続いて学費値上げがかたら

れ始めました。以降、学費値上げの白紙撤回を求めて、学費闘争が始まります。発表されそれを巡って、白紙撤回を求めて、学費闘争が始まりました。

この学費闘争の始まりは、今から思えば、これまで、60年安保闘争以降、日共系が牛耳っていた学苑会を、私たち研連を中心として、反日共系が学苑会を奪回する学生大会となっていくます。66年秋のことです。

この頃には、もうキッコーマンでの正社員としての仕事と大学の授業の両方がこなせなくなって、2年近く勤めたキッコーマンは、20歳の春に退職していました。そして、当初は、世田谷の中学の学区域にあった経堂の伯父の家から大学に通っていました。それでも夜10時の授業のあとの研連の活動や文研の会合は最終便にぎりぎりです。0:20分の新宿発の最終で帰ってくる私を、門の外で待っていてくれる子供のいない伯母の優しさが申し訳なく、気づまりになって、そこを出て小さな下宿を借りることにしました。婚約者とは、日本を変えるために、自民党を変革するという彼とラジカルな革命を求める私で、会う度に論争になっていた頃です。

この学費闘争を巡る秋、私は21歳になりました。

私の20歳は丁度、大学に65年に入学し、デモや学生大会、雄弁や選挙運動、婚約まで経験しました。自分の限らない献身や尽力が、社会や人々の力になるというとても一方的な信念に燃えていた20歳の時代です。(つづく)

私の二十歳代

米澤鐵志

私は1934年の生まれで、父が共産党員だった影響もあり、17歳で高校を退学になり20歳のときは広島で共産党機関紙アカハタの広島分局員をしていた。

当時極左冒険主義の時代で多くの武装闘争を見てきたが、共産党のどん底の時期で鬱々と「アカハタ」の仕事をしていた。

高校退学直後から、当時広大学の学長だった長田新氏が、「原爆の子」を出版し、その後「原爆の子友の会」を組織されたがそこに加盟し、占領下

プレスコードにより反原爆が禁止されていたのが講和条約によって解除されたのを機に公然と原子爆弾反対の運動ができるようになり「友の会」で活動していたが、第五福竜丸の水爆被爆を契機に原水爆禁止運動が一気に盛り上がり、アカハタの仕事の傍ら「友の会」の演劇運動や署名あつめに専心していた。また当時の「うたごえ」運動に参加しいろんな職場の仲間と交流していた。

1955年の原水禁世界大会には「友の会」の演劇や、広島合唱団による、第一回原水爆禁止平和合唱祭にも参加した。

1955年のいはゆる「六全協」で日共が極左冒険主義を自己批判したとき、私は高校に入りなおすことにし大学受験の準備にかかったが、悪名が高くどこの高校も編入を許してくれず、結局大学入学資格検定を受けて大学入試の資格をとることにし、当初親が医者である関係もあり、広大学の医学部の受験を考えたが、大検の試験合格に二年を要し方針転換し、当時末川博先生を中心に民主的学園といわれた立命館の二部法学部に入学したがすでに22歳であった。

入学してすぐイギリスのエニウエトク核実験があり自治会が抗議行動の提起に教室にきたのに、おっちょこちょいの私は自分の被爆体験をもとに核廃絶の演説をぶった。

活動家不足に悩む自治会はとんだ大物が入学してきたと、上部組織の学友会を含め自治会役員に立候補を説得に来て結局法学部自治会の書記長を引き受ける羽目になった。

これが運命の分かれ目で当時全学連は、日教組つぶしの「勤務評定」なるものを政府が強行しており、全学連は勤評粉砕闘争に全力を上げ、各地でストライキを煽動していた。私たちは勤評粉砕の全国最先端の闘争を提起しようと「前期試験の」ボイコット戦を提起し全学にクラす討議を組織した。

しかし二部の学生は大卒資格のための入学者も多く、職場の民青を説得するのが大変だったが、私たちは全学学生大会を召集し大会に試験ボイコットの議案を提出した。白熱の議論があったが、職場民青の一部が反対し

極小差でわれわれの提起は否決された。

傷心の私は丁度全学連が6月に開かれる道徳講習会阻止闘争を打ち出したので、自治会執行部はそれに参加することに決めた。(前期試験が始まったときだった)

当時われわれはまだ共産党の指導下であり、当時の革共同(現在の第四インター系)の全学連指導部には批判的であったが参加した。

夜、各大学の責任者会議があり、特別行動隊をつくり夜明けとともに会場の奈良教育大学に約二十名で侵入し、全国から受講に来ていた学校長、教頭を説得するという戦術を立てた(当時奈良学芸大学は占領軍から返還されて間もない場所で全体が金網のフェンスで囲まれていた)そして行動隊は深夜ニッパーという太い針金を切る道具で金網を破り進入し、受講生が起きて顔を洗いに出てきたとき、説得行動を開始したが、ものの五分もたたないうちに5, 60人の機動隊に囲まれ「住居侵入」で全員逮捕され12日間の拘留後起訴され、長い公判闘争に月一回ぐらいのペースで奈良まで通わなければならない羽目となり、最終的には懲役3年執行猶予4年の判決を受けた。

勤評闘争が下火になりだしたころ、かの有名な「オイ! コラ警察」の復活という警察官職務執行法が提案され、こちらにとっては千載一遇とも言えるチャンスがめぐってきた。

そこでわれわれは「警職法」粉碎の一週間ストを提起したが、先の試験がイコット失敗の反省と私の逮捕への同情もあり、学生大会は圧倒的多数で執行部方針を支持した。

しかしストライキがはじまると2日、3日目ぐらいからほとんどの学生が登校しなくなり、執行部はスト突入とともに次の重要課題は来年の「日米安保改定」にあると提起し、少数になった学生を対象に安保条約の学習会を始めた、幸いに警職法はスト4日目に廃案になり次の戦いへと展開していった。

冬休み前から安保条約の勉強を始めていたので年明け早々から、安保反対のクラス討議が進み、入試中も新入生対象のビラや情宣活動を強めた。

われわれは安保条約を「日帝」の復活を認めながら従属的軍事同盟と規定し、全学連中央の「反帝、反スタ」路線に対し「反独占、民主改革」を対置して戦ったが、これは共産党中央の路線を逸脱しており、たびたび中央から問題にされたが、まだ各県段階では問題にされなかった。

我々は民主的手続きで全学連の多数を占め「反帝、反スタ」の小ブル急進主義路線を克服したいと考えたが、全学連15回大会で主流派は前例のない自治会費未納を理由に反主流派の拠点だった東京教育大学の入場を拒否し、すでに半数近くの代議員を要していた我々を排除し、続く都学連大会も同様な手段(ここでは初めて棍棒などの武器を使って)反対派を排除した。(清水丈夫の指導と聞いている)

我々はここに止む無く全国学生自治会連絡会議を組織し全学連分裂の出発点になった。

私も全自連の中核にいて一方で共産党中央の指導をかいくぐりながら、安保共闘会議の指導下という看板を使いつつブンド全学連と対置していった。立命館では1部経済自治会に革共同系(第4インター)がいたがその他は全部いわゆる「民青系」(ただし指導部は共産党の綱領反対派で民青加盟者はゼロに等しかった)で学長を先頭に教組、教授会、学生と全学一致体制が取れ、60年はほとんどの授業が休講状態になった。

6月17日の全立命集会では司会の梅原猛(当時教職委員長)が樺美智子の死を悼んで「かばさんが、かばさんが」と絶句しながら涙を流したのが印象深い。

デモ出発のときM学友会委員長が「今日までの我々と政府権力の手先京都府警との戦いは7勝7敗1引き分けの状態だ、今日こそ府警の弾圧を圧倒的に粉碎し安保闘争勝利の山場を勝ち取ろう」とあいさつしたが、こちらにも代々木の指導が吹っ飛んでいるのが窺われた。

立命館ではこの年の「学費値上げ」反対闘争が印象的であった。立命では「全学協議会(全学協)」というものがありこれが教学の最高機関とされていた。当時の立命は「同立闘争」といはれながら、他の三校よりはるかに格下とされており、それが末川体制による「庶民の学園路線」にあるとし

た専務理事を中心にした理事たちが「安かろう、悪かろうではだめだ」と授業料の値上げを図るとともに、当時産業社会学部を作り京大の猪木正道、高坂正堯、大石義男？などを呼んで格上げ？を図ろうとした。

私たちは連日徹夜の全学協を当局に強制し学費値上げの「白紙還元」を求めて戦ったが入れられず校門にバリケード（当時はまだ珍しかった）を作り無期限ストに突入した。

スト中も全学協を開き「立命館教学」とは何かが議論され、二部問題、マスプロ教育、ゼミの充実など全般を論議したが、教学体制については前進したが、学費値上げの白紙還元にはどうしても応じず、我々が密接な関係を持っていた教職員細胞は「全学協」の権限強化、五者（学部長、組合、教授会、学友会、各自治会）懇談会で教学の具体的問題を検討するなど今後の道筋がついたので妥協すべきだ。そうでないと良心的教職員が離れると恫喝ともいえる説得を受け年末近くに多くの活動家の不満を残して終結したが、これで立命館の共産党教職員細胞の評価が上がり、後の全学共産党支配の基礎を築く一端になったと反省している。

全自連は全学連再建協と名乗り、新島の米軍試射場反対闘争や、文部省の大学管理法提出意図粉碎、国鉄の定期券値上げや学割引き下げ反対闘争、そして立命のような学園民主化闘争を闘った。

しかし61年共産党の第8回党大会で社会主義革命派が除名になり、再建協の党员たちも殆どが除名になった。地方では民青系の自治会も多く、大阪の後に民主主義学生同盟になった部分は再建協に非協力的で、代々木からも排除されなかったが、後に部分核停条約を巡って志賀らが「日本の声」を設立されるにいたって、共産党から排除されるが、再建協はばらばらになり、全学連の再建も夢と消え、立命館の「構造改革派」も68年ごろ民青に支配され69年の学園闘争に変わっていった。

私は61年の共産党除名と同時に、党员であった親から勘当同様に仕送りをたたれ、26歳にして大学を中退して、京都の病院に就職したが、ここからも波乱万丈の生涯を送るが紙数の関係もありまたの機会にしたい。

「十八歳自画像 想出描」 画家としての復権を求め 平沢武彦

死刑確定直後、平沢貞通は、圀圀三二一作「十八歳自画像想出描」という作品を描いている。白日夢のような緑の森、その光影のなかに、画家としてデビューしはじめていた頃の自画像の作である。私は以前、家にあるその絵を一時間位、見入ってしまったことがある。何か魔的な空間に心はとらわれた。死刑囚として、いつ処刑されるか知れない自分、そして画家として希望を持ち、北海道の風景をキャンパス片手に絵を描いていた頃。時空を越えて、死の絶望的な淵から、若き頃の自分を描くことは、どのような思いであつたことであろう。

画家の金山明子は、この作品について、次のように記している。

「最初に見たときに、人物画として非常に異様な感じがしました。何が異様かと申しますと、顔の皮膚が仮面のように張りついているという印象を受けました。背後に真夏のような木立があるんですが、光も非常に強い。そこに顔だけが、別のもののように張りついている。これは一つの囚われの絵ではないかと感じました。

その囚われたというのは、やはり身体が拘束されている不自由になった精神がもたらした顔。それが凍りつき、完全に時間が止まってしまっている。獄中で描いたわけですから、それが自分の囚われた時間と精神そのものが、ちょうど凍結されたままになっていると感じました。その中で十八歳という自分の青春が変貌している。ちょっと崩れていく、そこで、もう一度自分を取捉えなおそうと。だから自分が取り戻したい顔しか見えないという気がしました。描いていくときに、風景とか空気はもう一度描けるけれども、十八歳という自分自身を描こうと思うと、顔は見えなくなってきた。つまり現在の平沢さんの時期が見えない。自分自身が失われていると同時に、過去の十八歳の彼の姿も見えなくなっていたと思います」

キャンパスを片手に、様々な自然の風景を描いていた若い頃、そして画家として成功していった輝く日々。それは帝銀事件死刑囚の烙印のもと、崩れ去った。絞首台を前にした深い葛藤が、この作品に現れていると思わ

れる。そして、自分が人間としても画家としても、死刑の絶望に葬られてしまう現在、輝ける未来を持っていた若き頃の自画像は、現世との別れをも意味していた。

国家が奪った、画家・平沢貞通の存在、その画家としての再評価と復権を求める活動を二十年近く行ってきた。画家として、半世紀近く葬られた画業と絵に光をあてようと。平沢は生前「家宅捜索で押収された絵、代表作をおさめたアルバムを弁護士先生に頼んで、還付していただけますか」という思いを面会の際に、涙ながらに話していた・事件とは無関係の絵やアルバムをも拘禁されていたのである。それらの絵とアルバムは、平沢の死後十年たって私のもとに戻された。

私は、絵探しの旅をしながら、平沢貞通の画家としての再評価を求める活動をしてきたが、まず、郷里の北海道の古美術商をたよりに探し始めた。それは雲をつかむようなものだった。絵を持っていた人たちの多くは、帝銀事件死刑囚との名に、壁に飾っていた絵をはずし、倉庫の中にしまったり、骨董商に売ったり、転々とした。平沢貞通自身と同じく、逮捕前の絵は、闇に葬られてきた。その後、作品の所在は少しずつ集まり、百十数点を数えるほどになった。しかし、展覧会に出品された三百余の絵に限っては、十一人に過ぎない。なかには、雅号が削り取られていたり、謹呈者の名が墨で塗りつぶされてあったり、額の裏に「帝銀問題の人」と記されていた絵も数々あった。しかし、市立小樽美術館や北海道立近代美術館の若い学芸員が、帝銀事件とは関係なく、一人の画家として研究をし、北海道美術の先駆者の代表的な画家として見られ始められている。

その具体的な表れとしては、市立小樽美術館で、本年二月二十七日から五月九日まで「小樽水彩画の潮流 平沢貞通・埋もれた画業の発掘」との展覧会が開催され、平沢の作品は三十四点展示、そして北海道立近代美術館では、二月二十日から四月十一日まで、常設展で、第二回帝展入選作「春近し」が展示される。平沢の郷里の北海道では、画家としての復権が、ようやくなされようとしている。

まさか、平沢もこのように、郷里で画家としての雪冤がなされようとは

思っていなかっただろう。私は、長年、コツコツと「絵探しの旅」をおこない、全国各地で「空白の画展」を開いてきたが、そのような試みが現実に実ることもあるのだということを、しみじみと思う。それだけに、平沢が獄中で描いた「十七歳の自画像」、という作品は痛ましく感じる。逮捕後六十二年目の郷里での雪冤である。

(十八歳自画像想出描一絵作品は裏表紙に掲示しました。)

泉水博さんの「与作」が聞きたい。一日も早く！

—泉水博さんの面会に行ってきました。—

森本忠紀

泉水博さんの「与作」をぜひとも聞きたいと思う。

「与作」は北島三郎が歌ってヒットした日本で広く知られている曲だが、北島三郎の「与作」を聞いたパレスチナのコマンドが、泉水博の「与作」を歌うからには、もしかしたら、北島三郎というのは「日本赤軍」のシンパサイザーなのかと聞いてきたというエピソードがある。思わず笑ってしまう愉快的エピソードだが、考えてみるとこれは凄惨なことだなあと思う。泉水さんはきつととも歌がうまいのだろうが、それだけに留まらない。ただ、うまいというだけではなく、泉水さんの「与作」はアラブ世界でも愛され評価されていたであろうことを、このエピソードは窺わせる。なぜそれほどまでに愛され評価されたのだろうか。

アラブ世界の人たちにとって、日本といえばほとんどが、行ったこともなければ、知ってることも少ない国に違いない。そんな人たちは泉水さんの歌う「与作」によって、日本に対するイメージを喚起できたのではないだろうか。泉水さんの「与作」を聞いて、人々をはるか離れた遠い異国の文化に憧れを抱き、また親しみを覚えたのではないだろうか。泉水さんは日本人というもののイメージをアラブ世界に伝えた。それは、どのような日本人なのかというと、労働する日本人だ。労働と言っても泉水さんの場合、第一次産業といわれる、農林水産業の労働に特に深い思いを持たれているような気がする。泉水さんは民謡が好きで、岐阜刑でも民謡クラブに入っておられて、特に好きな民謡は何ですかと訊ねると、「刈干切歌」と答

えられたので、「与作」とあわせて、農林水産の労働から生まれた歌を歌うことが特に好きなのかなと、ぼくは思った。ぼくの勝手な判断かも知れないが、泉水さんという人はその語り口、表情から、そんなことが思い浮かぶほど、何かちよつとしたことをとても大事にされる人に違いないとぼくはそんな気がしてしまう。そんな泉水さんが歌う「与作」から、アラブの人々は労働する日本人の姿をイメージし、労働する日本人の精神を感じ取ったのではないだろうか。ということは、泉水さんは「与作」一曲で、日本をアラブ世界に紹介し、伝えた国際文化使節なのだ。貴重な人というべきだ。そんな人を私たちの国は牢に閉じ込めている。

「与作」を歌う時、北島三郎をまねて歌いますかという私の問いに、「最初はまねて歌ってたが、自分は素人なので、自分なりに歌うようになりました」と答えてくださった。芸術は模倣から始まる。できるだけ正確に模倣する、それができた時点で、今度は自分独自の表現にチャレンジする。泉水さんの「与作」はそうにして生まれたのではないか。「自分は素人ですから」と言われた、そここのところを私はそのように聞いた。この歌から、泉水さんは、かつての自分がそこにいる、懐かしい日本の山野の情景が思い浮かぶのかもしれない。あるいは、木を切る与作は昔のごく親しい、あの人、この人を思い出させるのかもしれない。泉水さんが「与作」を選んだのは、逆に「与作」が泉水さんをむんずと掴んだという事かもしれない。それならば、そのモチーフが泉水さんをして北島三郎を離れた独自の歌表現へと向かわせるのは当然だ。それはこう歌おうと考えてやるのではなく、北島三郎を真似た歌い方ではどうしても満足できないものがあって、そこで少し違った歌い方をして、自分の気持ちにピッタリだと感じてこれでいこうというように、だんだんできていったのかもしれない。そしてできあがった泉水「与作」は北島「与作」とどう違うのだろう。とても興味深い。もうそれは聞いてみないことにはわからない。ただはつきりしていることは、アラブの人々は泉水さんの「与作」を評価し、愛したということ。音楽の素晴らしい聴き手、聴衆だ。日本の私達はどうか。アラブの人々が聞いたように、泉水「与作」を聞くことができるだろうか。それどころ

の騒ぎじゃない。すばらしい歌い手を牢に閉じ込めて、歌を聞くも何もあつたもんじゃない。それが、わが日本の文化水準だ。いい音楽を聞きたいというぼくたちの欲求はどこへ行ってしまったのだろう。この日本、ありとあらゆる音楽があつて、どんな音楽でも聞けそうな気がするが、その実、新しい世界を開いてくれるような音楽に出会う機会がとても少ない。まだ耳にしたことがない音楽を聞いて、それまで知らなかった世界が一挙に開ける。そんなときめきは何物にも替えがたい。アラブの人たちが聞いて評価し、愛した「与作」はぼくにはそんな歌のような気がしてならない。

早く出てきてほしい。一日も早く出てきて、私たちに「与作」を聞かせてほしいと思う。泉水さんは一体いつごろ出れるのか？それが問題だ。いつごろ出れるのかまったくわからないのだ。泉水さんは服役中の無期刑が既に5年前に、仮釈放検討の段階に達している。ところが仮釈放の前にもう一つ、懲役2年の有期刑があるので、これを先にすまさなければならぬのだが、逮捕されてから22年経つ現在まで、それをやらせてもらえないままなのだ。なぜかというと、刑の執行順序変更「順変」というものを申請して、それが受理されなければ刑に服することができず、無期刑の前にまだすんでない、この有期刑がぶら下がってる状態で、いつまで経っても仮釈放の見通しが立たない。なぜ受理されないかということ、この「順変」受理のためには、行刑（受刑）成績の良否という絶対的な条件があつて、年間を通して無事故であるという実績を何年も積み上げねばならない。要は“受刑態度が悪ければ認めませんよ”ということだ。それも、1年、2年の実績では決して認められず、それではと頑張つて、3年、4年と無事故で実績を積み上げても、ひとたび罰則をくらえば剥奪され、元の木阿弥、またゼロから出直しということになる。

泉水さんの場合、'02年に4本あつた無事故保持数が罰則により、2本減らされ、残った2本を翌'03年に剥奪されたが、この二度の剥奪がなければ、'05年に身柄引受人が決定したので、無事故保持本数は6本となり、その時点で「順変」クリアの条件はすべて整っていたのだ。その後、4年半かかって3本の無事故本数を獲得したのに、'07年粗暴言辞という懲罰

事犯で15日の閉居罰を喰らった上に、その3本をすべて剥奪され、またゼロからの出直しとなった。このままだとあと3年、それも無事故で過ぎなければ順変は実現しない。

人間がこの世でこのような仕打ちを受けてよいと誰か言うという人あるだろうか。せつかく希望の光が見えたところで、もうじき出れるという希望は霧の彼方に閉ざされ、一挙に絶望のどん底に蹴落とされてしまう。剥奪処分というのは、剥奪された無事故保持本数の分だけ懲役年数が加算されるのと同じこと、実質、刑を上積みされているのと同じことになる。いったい、どういうことが懲罰の対象になるかという、担当刑務官と“目と目が合った”、“抗弁した”、拭身の時間に、手の汗を拭いていて膝の裏が痒かったので一度擦ったら“拭身違反” e t c…。そんな内容だ。

これが民主国家と言われる日本社会の実情だ。ぼくは泉水さんの支援誌「アッサラム」を読んで初めて知った。それまでこのような実情をぼくはまったく知らなかった。多くの人がぼくと同じではないか。泉水さんはこの国の司法制度・監獄制度にこれほどに翻弄され、痛めつけられている。そもそも無期刑を科せられた強盗殺人がまったくの濡れ衣だった。実際は、強盗が目的ではなく、また主犯でもなく、共犯者の殺人を止めたのに、強盗殺人の主犯にされてしまい、無期懲役が確定した。それでも、泉水さんは事件そのものを非常に反省し、15年間模範囚で、仮釈放も間近になっていた。ところが、刑務所当局が囚人の仲間の病気を放置していることに抗議して、当局に対して一人で決起したので、仮釈放がなくなり、無期刑やり直しとなっていた。そこへ、ハイジャック闘争が起こり、獄中から解放を指名された泉水さんは人質の命を助けたい一心で、獄中から出国、その後、日本赤軍に加わって、パレスチナ解放闘争を担ったが、裁判では、それが逃亡したと決めつけられている。

先日、今年1月のこと、岐阜刑へ面会に行つてぼくは泉水さんを前にアクリル板越しに、「与作」を歌った。泉水さんのようにはとても歌えないけど、一日でも早く出てきて泉水さんに「与作」を歌ってもらいたいの、その呼び水にしたいという気持だった。こんなぼくの気持に共感、賛同し

てもらえる人がいれば、ぼくはその人たちと一緒に「泉水博さんの『与作』を聞く会」を作りたい。そして一人二人と賛同者を増やして行って、みんなで力を合わせて、泉水さんの「与作」を聞く日を一日も早く実現させたいと思う。

短歌で遊ぼう(9)

さわ女と「寄っといで短歌」

題詠～「変」～

<さわ女>

「判決は年度末3月までは確実だろう…」と言われ、「さわさわ」の友人たちも去年から今年と面会に来てくださいました。森本編集長も、子供たち夫人と家族で、また、田川さんは朗々と、「白鳥は悲しからずや空の青～」の歌を歌ってくれました。そしてみんなで「琵琶湖就航歌」を合唱しました。このアクリル板を取っ払って、スクラムを組んで歌いたい！そんな思いで胸熱くみんな涙目。「わかれ」というよりも、うれしい、始まりを誓うような面会でした。今回は「さわさわ」にこうして「短歌で遊ぼう」の私の感想は、書くことができないかもしれないと思っていました。(判決の後はその一つ一つが難しいと言われています。でも4月新年度を「未決」で迎えて、再び「短歌で遊べる！」機会を得ています。

また、悲しいお知らせですが、「短歌で遊ぼう」の常連「ごめんねジロー」さんが2月25日頰癌で亡くなられました。ここに慎んで哀悼と連帯の気持ち捧げ、辞世の一首となった「さわさわ」10号の一首を再録します。

「願はくはのどけき光あびながらうつらうつらとあの世とやらへ」合掌。

影法師(岐阜刑)

ようやく桜の花が咲く季節となりましたが、ふうさん初めさわさわ会員の皆様にはお変わりありませんか。特に自由を束縛されている獄中の皆様にとっては、辛い毎日でしょうが、その苦しみに負けることなく、望みを捨てずに頑張りましょう。さわさわ10号でお尋ねの母岳山という山は日

本ではなく韓国にある山です。と申しますのも、昨年暮れに、日頃お世話になっている森本名美子さんが、ダン・ワールド（韓国式ヨガ）の指導者となるために韓国の母岳山という山で修業するという話がありましたので自分もこの母岳山で修業したつもりで、短歌や俳句を作ってみました。実は私も森本名美子さんの勧めで、韓国式のヨガと気孔を始めましたが、6ヶ月余りで、持病の自閉症や腰痛、肩こりなどがすっかり改善され、今では精神的にも安定した生活をさせていただいております。それから、ふうさんの著書である、「日本赤軍私史—パレスチナと共に」を読ませていただきました。パレスチナでボランティアという形で、長きに渡り解放運動での活躍は、私に多くの感動を与えてくれましたし、また正義とは何であるかということもはっきり教えられました。そして中東の歴史はもとよりイスラエルという国がいかに残酷非道な国であるかも知りました。さらに本の末尾にあった裁判記録も読ませてもらいましたが、旅券法違反等での起訴はやむを得ないとして、三十余年前に起きたハーグのフランス大使館占拠事件で確固たる物的証拠もなく共謀共同正犯として検察側が起訴したことは明らかに不当な扱いだと思います。法廷においても、ふうさんがこの事件に無関係であると多くの方が証言しているわけですから、検察側もこれ等の証言をすみやかに受入れ、ふうさんを無罪にすべきだと思います。とにかく私はもとより、ふうさんと一緒にパレスチナやにほんで中東の平和活動をしてきた人たちは誰よりもふうさんの無実を信じて応援していますので、辛くさびしい毎日でしょうが頑張ってください。

- (1) 大変だ国債発行行進中このまま行ったら日本は終る
- (2) 仕事終え夕焼け空を見上げればカラスの群れは罅をめざし
- (3) 夕暮れに炊の煙り棚引けば童は競いて家路を急ぐ
- (4) 人生に過酷な試練があろうとも君よ生きぬけ望みを捨てず
- (5) 刑務所は住めば都と謂うけれど一度は出たし無期囚の我は

俳句

- (1) 窓越しに我を励ます冬すずめ
- (2) 霜焼けに搔けば痛くて進行中

- (3) 菜の花や今日も元気に声を掛け
- (4) 川の土手西洋タンポポ我招く
- (5) 踏まれても愚痴も溢さずノボロギク

<さわ女>

影法師さんは、いつも他人に配慮する優しい心がけの方ですね。そんな心がけが文に溢れています。ヨガで体質改善、いろいろなことに主導的にかかわる機会になっているのですね。母岳山のことはわかりました。また、「日本赤軍私史—パレスチナと共に」読んでくださってありがとうございます。政治的な部分も多く、読みにくかったかもしれませんが、とてもありがたい感想です。また、前号で、影法師さんの「二十歳の私」の中で、「ふうさんは蟻地獄釣りをしたことがありますか？」との質問に「もちろん！」です。ガキ大将の私は近所の男の子や女の子を連れて豪徳寺の山道の、斜めの幹のした、雨に濡れない所にいるんですよ！松の葉や本物の蟻で巣に挑発して蟻地獄が挟みそうな姿を見せるとさっと掬って本当に競い合って取りました。もちろんオケラもです。でも私達は「チンチンはどんだけー？」なんて変なことは言いません。「お前の財産どのくらい?!」と言うのです。ざりがに釣りももちろんですよ。でも私が決めていたルールですが、獲物の分配が一番小さい子に多くあげるルールです。蟻地獄も壘に置いて、オケラもザリガニも小さい順にいっぱい持ち帰ります。楽しい大盤振る舞いはあの頃からやってたなあと、思い出しました。以上、質問に答えつつ影法師さんの二十代の反省は今の生き方を輝かせていますよ。

短歌には反省があるからこそ、もう一度今の心がけで社会に尽してみたい、「さわさわ」の人々と交流したいという思いとしてあらわれますね。(5)をそのように受けとめます。(4)は私も励まされます。(1)も(2)も(3)も獄外の社会にいるような歌の雰囲気です。俳句は短く情景を巧みに詠んでおられます。いつもですが、どの句も、でも、独りですね。改めて、過酷な長期の拘留の中で友情に巡り合って、鳥や花や目に映るものを生きる力に詠んでいるようで共感します。(1)、(3)と(5)の句は特に気に入りました。

M・M (岐阜刑)

さわ女さんこんにちは。暗い中で日々癒と闘う中、最高裁判決ももうすぐとか。善悪とも新しいたびに変わりはあります。一縷の望みにたくされますよう暗い中より小さな光を射し上げます。そして毎号にてさわ女さんのコメントにウキウキしてたり短歌俳句を作り期待に応えようと拙い作を投稿させていただいております。これからも「さわさわ」を愉しみにしておりますので続けられることを切に願います。

- (1) 言っとくけど総理も幹事も夏いのち変も変だよ言っとくけどね
- (2) 時明けてしとしと降りしさつきあめ遠く聞こえる山鳥の声
- (3) 雨やみしある夜ひそかに月ありてかがやくときやわが窓暗し

俳句

- (1) 黒豆も数の子もないそのまま
- (2) 咲いてまた逢いたい人の名を想い
- (3) イラストの飛び出し虎の初笑い

<さわ女>

M・Mさんはリズムカルで特性のある歌人に成長しそうではありませんか?!これから才能が開花しそうです。(1)はとてもおもしろいです。ただ、意味がわからないところをもっと添削してみたら、もっと磨かれると思います。「変」の題詠を詠もうと苦労されたせいかな?「夏いのち」が参院選のことを指しますか。それならそうした方がいいかも。詠みなおそうとしたけど手に余りました。(2)(3)も情景をもっと言葉を整理したら輝きますよ。(2)は「あけぼのに静かに降りしさつきあめ遠くきこえる山鳥の声」とか。(3)「雨やみて見上げる夜の月明かり取り残されし獄窓暗し」とか。私もヘタであまりよくなってないですけど、作ってからあれこれ並べかえたり、つきつめていくと味が出てきますよ。俳句はなかなか決まっています。(1)も(3)もなかなか味があります。更に発展を期待します。

Y・M (千葉刑)

さわ女さん、体調はいかがでしょう。日本の医師は患者に負担がかか

る治療をする人が多い国です。副作用、精神的な負担、金銭面。医は仁術という言葉がありますが、本人が治るために心から元気でいられる様な治療をしていただければと思います。私の知人が無期刑で仮釈放後、再犯して岐阜刑へ入り、脳梗塞で八王子医療刑務所へ入りました。私のことを気にしていたと知り、生きることを諦めないでほしいと願っています。塀の中は希望を持ち続けて生きるにはかなり苦しい人もいますところ

- (1) 生きていた遠い時間を振り返る一枚の写真今の私は
- (2) ガキ共に追われて踏まれ遊ばれてグチャグチャヘア八千円也
- (3) 泣き止まぬ赤子を借りて鼻先にティッシュをヒラヒラ笑顔に変わる

<さわ女>

励ましのお便りや、貴重なパレスチナの子供たちの元気な写真コピーなど送ってくださってありがとうございます。誌面を借りて感謝を伝えます。本当に獄中の特に受刑者への医療のでたらめさを何とかよいものにしたいですね。国際社会の獄中処遇とかけ離れた日本の、ひどい規則にはもっと国際的な基準を日本社会に広く伝えつつ変革してほしいものです。私も判決後も処遇改善など求めて獄内外「さわさわ」や救援連絡センターの皆と協同しつつ進めます。獄内から実情を伝えることが大切だと思いますので、短歌も処遇改善に向けた報告も!ですね。希望を持ち続ける人を増やさないと!

今回の歌は、(1)は獄にいるからこそ響きます。様々な思いで何度も繰り返し見ているのですね。これからの希望に繋げてください。(2)はどこでやられたのかな。八千円のヘアースタイルがぐちゃぐちゃになるほどやられたのですか?こういう歌はきっと過去の一瞬にシャッターを押した写真のようにリアルないい歌になりますね。(3)もその流れですね。記憶を短歌の写真のように詠まれていておもしろいです。

丸岡修 (宮城刑)

久しぶりに、うたかたの歌方 (たたかううたかたのうたかた)

08年12月入院

- (1) 医師が来て今日の診察結果「とても良し」病室に映える冬の夕日
- (2) 手術終え厚きカーテン開け放せばパノラマウインドウ光るシリウス
- (3) 「ありがとうこんな患者さん初めて」良薬はナースの誉め言葉

09年8・30

- (4) 矢尽きても待ちに待ちいた半世紀光となるか政権交代

09年晩秋

- (5) 木枯らしに踊る紅葉に誘われて獄の夕日もキラキラキラ
- (6) 脱水の脳虚血湿疹となりて光と闇の境に生きる

(11/7、ゾルゲ、尾崎秀美同志らの命日、一時は死ぬかと思いましたが、一時間たらずの全身麻痺ですみました。まだくたばるわけにはいきません。)

2010年正月

- (7) 初日影四十余年奔り来て庚虎(かのえとら)の還暦となりぬ

(以上、「光」の題詠で詠んだ短歌、官刑は出ていたのですが、こちらへの到着に少し時間がかかり、残念ながら10号には間に合わなかったのが、今号にけいさいさせていただきます。ところへ題詠「変」の短歌、到着いたしましたので、丸さん、今号は、ダブル掲載です。ありがとうございます。)

3月30日は檜森の自決から8年。日比谷公園に皆さん集まってくれたそう。改めてあいつに言いたい。「あほんだら!」。ずっこい。

題詠「変」に。(私のは短歌なのか狂歌なのか、ただの短文なのか)

- (1) 春の雪酸素吸入受けながら変わらぬ日本の変化を待つ
- (2) 自らが変わらなければ現実の世界変わらぬと分ってはいる
- (3) 変化への反動の嵐にもまれ開花遅れる大和の国は
- (4) 変わり身を恥と思わぬ元左翼日本製ネオコンがはびこる
- (5) 群雲に覆われていても月あかり世にまつろわぬ我は変わるまい

(本人の解説と言訳)

- (2) マルクスは言ったのに、その後の左翼は…。(3) 旧体制派の自民

党と官財界とマスコミと検察による民主党バッシングとそれに踊る人々を見ると、日本の民主主義の開化・開花はまだまだ。(4) ブッシュ政権を支えたネオコンブレインの何某(名前忘れた)は元トロツキスト。日本では渡辺恒雄のようなヤメ共産黨員などゴロゴロいる。(日本のはただの右翼反動か)ところで、日本のマスコミなどは、中国による日本人に対する死刑執行を批判的に報じていますが、日本の制度よりはマシな、事前通告と執行前の家族面会については触れず。(それはそうと、毛沢東が「一度切り離れた首はつながらぬ」と反対していたのに、多くの日本人戦犯も死刑を逃れたのに、今の中国は重罰主義に毒されている。日本も鼻糞の類ではある。)題詠「光」の(2)「シリウス」と詠みましたが、12月初旬の一番星はシリウスではありません。名前忘れたので「シリウス」使用。

<さわ女>

丸さんの救援誌「夢と希望」を読み、とっても心配しました。科学的データでは心臓は危機的状態。気力だけで繋いでいるようでしたから。「さわさわ」や他の仲間や他の友人が丸岡さんの「刑の執行停止」を求めてきちんとした病院で治療しなければ冬を越せないのではとずっと案じていました。ところが、検察は年度末3月31日、「刑の執行停止要請」を却下しました。刑事訴訟法でも「刑の執行によって生命を保つことができないおそれがある時に」つまり生かすために刑の執行停止が行われるはず。丸岡さんには「100%死ぬ時」にしか出そうとしません。見殺しです。これが今の検察の受刑者に対する「執行停止」の基準なのです。法にも反しています。裁判所ではなく検察が判断権を持っています。「超法規的措置」で国の面子をつぶし、「脱獄」を強いた「日本赤軍」への政治的報復は激しいものです。特に軍司令官の位置にあった丸岡さんに対しては「死亡してから」または「死亡が確実になってから」という人権無視です。これは実質死刑であり、「重信を一生獄から出すなど言われてる」と、私の事件デッチあげをやった検事は証人の取調べでも上層の意向を述べていました。処遇改善を人道的観点から、法の精神を問いながら、丸岡さんの「刑の執行停止」をみんなの力で実現してほしいと祈る思いです。

その丸岡さんからの歌、どのような環境にあっても生き抜くこと、希望があること、必ず仲間がいること、「敗北は勝利の土台へ」日本赤軍精神が脈々と歌われていて共感しつつ励まされます。ことに(2)も(5)も「死ぬか」という病状の中で前号「さわさわ」の「光」の題詠の広大な季節を詠んでいいですね。また丸さんは還暦の年です。これはきっちり格調のある歌になっていますね。

題詠の「変」はうまい!と思うのがあります。(1)は「春の雪」の始まりがいいです。覚悟をしつつ希望を断固として持つ志が春の雪と響きあっています。(2)は結びの「分ってはいる」は何とかならない?「今日も刻みぬ」とか「伝えたき友よ」とか、丸さんらしく前向きに響くように…と。(3)(4)(5)は丸さんの心意気がいいです。(5)は「我は変わるまい」丸さんの意図は決意を示しているのですが、推量にも取られてしまいます。「我は変わらじ」とか「変わらぬぞ我」にしたら強調になるのでは…。総じて、制約されて、書くことも発信も一ヶ月に4通の中、「短歌で遊ぼう」に参加してくれてありがとう。ようし、私も、判決後も、やり方は変わっても、「短歌で遊ぼう」でみんなと共に出会って行こうという工夫をしたいと、ふつふつと思いました。丸さん、生きてみんなで歌おう!スクラム組んで。共に!“変転に天落つるともいや増して天の割れ目に希望みる我らは”丸さんの心意気への返歌。あれこれ言った割には私のも歌になりきれません。おそまつ様です。

せえたか童子

時は満ちみんなで歩む再会の道寒月の中月は凍てつく

<さわ女>

せえたか童子さんは歌のライブでインターナショナルを歌ったという新聞の切り抜きを添えて一首を送っていただきました。そのことから、いつか共に「さわさわ」仲間たちが再会していくことができると、私を励まして送ってくださったのだなと思いました。ありがとうございます。

華灯

(1) エアメール日付変更線越えて行く昨日の君へ明日のぼくより

- (2) かくれんぼ無邪気さに潜む無慈悲さに驚き怯える変声期の頃
- (3) 金太郎飴切っても切っても変わらぬ顔石もて砕けば転がる小顔
- (4) 変面師素顔失い一撫でで変わる笑顔見るが恥ずかし

(変面師は中国雑技団に顔を撫でるたびに一瞬に面を変えて行く技を持つ達人を私がつけた名です。)

- (5) 芋虫に畳み込まれた揚羽蝶変化の先に春が過ぎ行く

<さわ女>

「題詠『変』は観念だけの歌ですが、五首。」との文と共に送ってくれました。「変」の変化が実態なのか観念なのか?「変」を通して鳥瞰のように見つめる視線を感じます。その視線の主体をまた、己が見つめるような歌ですね。

(1)は何かを凌駕した目線から「君」ではなく「僕」をみているような観念も溢れているようです。(2)は自立していく少年の内部を覗く思いで読みました。(3)は金太郎飴の実態の破壊からまた、変わらない正体が示されたことが驚きのような「変」(4)は私も観たことがあります。でも北京の胡同で、子供たちを集めて子供たちを喜ばすために、農民姿のままに演じている姿は、ほのぼの、人々の楽しみのようした。きらびやかな雑技団の達人を「恥ずかし」という華灯さんの実感はわかります。でも哀しみもありますよね。どう変えても変わらないような。(5)さすがは「畳み込まれた揚羽蝶」の表現は巧みですね。

私は(5)が一番好きです。「変化の先に春が過ぎ行く」は「変化の先に我が夢の散華」なんて「変」じてみたくなりました。「変」の逆説みたいな考えさせられる歌でした。感謝。

すみ女

- (1)和草に凍れる土も濡れ始むかそけき春の訪なひくれば
- (2) 枯れ枝と見るより芽ぶく新緑の伸びて開きし去年の紫陽花
- (3) ランドセル背負ふをみればあどけなさ 消えて見ゆめり 六才の春
- (4) 乳飲み児の よだれ光らせ 独り立つ こぼれる笑顔 広がる世界
- (5) 仕事辞し目覚まし止めて深夜寝る24時間すべて我がもの

<さわ女>

作歌歴の長いと思われる、すみ女さんの歌は言葉も洗練されていて学ばれます。(1) など特にそうです。「かそけき春の訪ひくれば」など歌にまだ慣れていない人には浮かばない語ですね。(2) ああ、もう枯れ枝のような紫陽花にも新緑が戻りましたか？東拘の旧舎の一角、そこでは裁判所の出廷や戻った時に、手錠をかけた外したりするところでしたが、窓の外に大きな紫陽花が一本ありました。ちょうど年度始めの桜の終わったところの出廷の時、枯れ枝の中からふくらんだ緑があちこちに萌えているのが見えて心躍らせたものです。すみ女さんのやさしい観察の目にそれを思い出しました。(3)(4)(5) は子供をいとおしむ、すみ女さんの視線と自分の幼な時を重ねて、心深く考えておられる姿が浮かびます。また(5) は、もう24時間をただ自分のものとして生きる、自由も喜びもまた不安も、そしてそんな思考もまた解放して安眠に帰っている独り寝の様子を想像しました。

すみ女さんの歌は人生がありますね。とてもいい歌にあいました。そんな達人よりも素人の私ですが、「短歌研究四月号」に二十首「風の共和国序章」として載せてもらいました。友人が勧めてくださったのですが、やっぱりプロの歌人の中に並んでいると「素人のりきみ」が出て赤面です。もっと歌心に適切な語彙を学びたいとすみ女さんの歌から刺激を受けています。

哲蕉

- (1) 習うより慣れるとはこれ認知症予期せぬ言葉飛び交う世界
- (2) かの人の一日と我の一日重さの違い知りてこそ介護
- (3) 変革を夢見し我等老いてなお持ち続ける小さき大志
- (4) 小さくも抱き続けた熱き意思老いゆく今も変わることなし
- (5) この為生きる力と友情を抱かせ続ける変革の文字
- (6) 同じ事繰り返す言う老女の変ることない記憶は確か
- (7) この人に輝ける日々ありて変わり果てたる昔を偲ぶ

<さわ女>

哲蕉さんは交通事故の後遺症もなく、2月初めにヘルパー研修を終えて、晴れて資格を取ったようです。そして就職。コミュニケーションの得意な組合リーダーの哲蕉さん。余り喋らない認知症の方々も喋り始めて和気合い合いで若い人と違った役割で活躍中です。そんな中で、(1)～(2)も(6)も(7)も、新しい活動を詠んでいます。(1)(2)は働いてこそ分る教訓で警句のようです。自然に日常の中で詠むように零れている哲蕉さんの歌がぐんとよくなっていますね。(3)～(7)は題詠を詠んだものですが、(3)(4)(5)は同感です。きっと、「さわさわ」の多くの仲間も共通した思いですね。変革への熱い思い、ずっと変わらぬ矜持として持ち続けることによって、すがすがしい還暦を迎えた哲蕉さんの悔いのない生き方が力の源泉ですね。そして、老齢の方々、認知症の方々と交わり、介護し、支えながら、その人々の生きてきた輝きを忘れることなく、友人のように接しようとする、哲蕉さんの姿が浮かびます。「この人に輝ける日々ありて変わり果てたる昔を思う」は「この人に輝ける日々あり確かなる歴史の果ての認知症なれど」こんな風にした方がよいかと詠んでみましたが、まだうまく納めきれいていません。

介護現場の中から良い歌が更に生まれそうです。

かおり女

見わたせば変化旅立ちの春来たり我が身ひとつが路傍の石か

<さわ女>

フリージャとマーガレットを友人が摘んできてくれてその香りが部屋を満たしてくれていて幸せな気分の中で手紙をくださったというかおり女さんの一首です。でも人生を思い、少し周りの変化に取り残されている自分を感じるところから生まれた一首のように感じられます。お便りに、まわりの知人、友人たちの不遇を知り、「日本は不条理なことが多過ぎます。」と決然とした一言も一首に添えられていました。本当に、不況下で、弱い者はより犠牲を強いられる日本。それでも、社会の変化、変革は一步步進めていく中で、様々な絡まりの中から導きの糸を掴んでいけることを願っ

ています。共に「さわさわ」で繋がれますように！

原啓介

- (1) 春告げる桜悲しき鴨川の流に散りし薄桃の花
- (2) 中東に亡き友の墓訪ねると意志に刻みし三月の末
- (3) 切り立ちて鳩も通わぬ岩ふたつ瘦せ学生の夢の痕
- (4) 変転の我が身に寄せて振り返る世に問うものも時が変わりて
- (5) 変わりゆく時代に抗す気力あり孤墨守りし山門に雨
- (6) 変化せず自ずから見て頼りなき多くのことを語ることなし
- (7) 荒神橋高野悦子と檜森居士変わらぬ思い京に残して
- (8) 東京と我が京都にはお互いを変えてしまえる手だてすらく
- (9) 花冷えに襟立て歩く高瀬川象山遭難碑変わらず在りて
- (10) 幻を見たかのごとく静脈に今流れゆく不変の抒情

<さわ女>

(1) は美しい情景が浮かびます。細い水の道を散り花が静かに流れて行く時の、いわれない哀しみが一首に溢れています。そして(2)(3)は対の連なって私には読めます。四月、リッダ闘争の戦士たちの墓参りに行く歌に添えてありました。その墓には檜森さんの遺灰もリッダ戦士たちとともに眠っています。(檜森さんは2002年3月30日の土地の日に日比谷公園の桜の下でイスラエルに抗議して自決したリッダ戦士たちの仲間。かつて立命館大学の学生でした。)(3)の「切り立ちて鳩も通わぬ岩二つ」はベイルートの地中海の中に、陸と面してすぐそこに立つ、ピジョンロックのことですね。小さなこの岩の下で、1972年1月、仲間の京大生が寒中水泳中に心臓麻痺で死にました。そして残された仲間たちが再び契りを交わして闘ったのが72年5月のリッダ闘争です。そんな仲間たちと会うための墓参のようです。夢を共有した者たちの連帯として。次の(4)～(10)は題詠にある「変」を歌っています。それも(1)～(3)に繋がります。あの71年から闘いを経て「自分を変えることなしには世界を変え得ない」とひたすら変革を求めてきた私と「変わらないこと」「変えないこと」に断固として価値を置いてきたような檜森さんの歩み。リッダ戦士た

ちとの契りを胸に、檜森さんも私も両方とも合わせ鏡のように闘い続けてきたのかと思うことがあります。(4)から(10)に詠まれた歌も変わろうとして変わらないこと、変わらないつもりでも、時代の中で変化してきたこと、気がつけば世間には受け入れられることのなかった夢を、変わらず熱くだしている己を、様々な情景から現認している作者の姿が浮かびます。この題詠の中では特に(5)が好きです。(1)とまた引き合う一首です。

森本忠紀

- (1) 沖縄の海を思わす青き空「基地いらぬ」と旗翻る
- (2) 基地反対の人ら集えるその中に二人の幼き吾娘も位置占む
- (3) 岐阜訪ね面会したる老囚の優しき笑顔臉に帰り来
- (4) 沖縄のピースウォークを迎える日高田河畔に桜咲き初む
- (5) 五十年変わらず闘い続く人ピースウォークの先頭歩む
- (6) 沖縄の美しき景色美しき心壊すな基地許すまじ
- (7) ひたむきに変革求めアメリカへの平和の使節吾もその一人
- (8) 40年経てのよど号シンポジウム吾は仲間なりまたライバルなり
- (9) 一心に吾が変身の三分は三線片手に歌語るとき
- (10) この日本社会の変化の激しくてわが保育所の苦しき経営

俳句

- (1) 空の青菜の花黄色平和染む
- (2) 平和の芽芽生える大和の田舎道
- (3) 春の野をピースウォークの見え隠れ
- (4) 沖縄の心や無惨花嵐
- (5) 基地撤去春中沖縄はるかなり
- (6) ピースウォーク雨も道連れ春の昼
- (7) 地を固め桜の古都に雨三日
- (8) 花の小雨に歩けば招かるる
- (9) ビラ配る隣組にも春の宵
- (10) 「核いらん」春空揺るがす大合唱

<さわ女>

この間、東京の日比谷のピースウォークを娘二人と参加したり元旦から始まった沖縄ピースウォークの奈良の受入れを作ってきたり、その発展として4月30日から5月6日にニューヨークへ。「核不拡散条約」再検討会議に参加するとのこと。とても嬉しい拡がりです。去年秋から晩秋と忠紀さんにご両親を喪くされ、悲しみ以上にご両親への感謝と最善を尽した思いから、今年は一心に活動に全力投入ですね。もちろん子供たち、家族と共に。そんな思いが(1)から(10)の歌に込められています。どの歌も活動そのものが歌にすっと零れていて、情報も情景も伝わります。歌からどんなフィールドを走っているのかがよくわかります。(10)で私も思わずニンマリ。平和運動、救援運動、国際会議、そして保育園長。(これが一番大変でしょう。子供たちと楽しむのは得意の忠紀さん。問題は経営！何とかトントンに！)俳句は私へのお便りの中にも、いつもはっとするほど、切り口の鮮やかな句が多いです。(1)はいいですね。どの句もいいですが、(9)もなかなか情緒が深く好きです。「春の宵」が効いていますね。この俳句の(1)から(10)共、ピースウォークを地元でやり、新しい人々と出会い、晴れ晴れとした気持ちで、本音で、家族ぐるみ、地域ぐるみの繋がりを育てていることがとてもよく伝わってきます。ピースウォークの繋がりを各地、各県、全国と、一面の菜の花のように、青空に繋げて全基地を米国に返しましょう！そんな思いが全体に流れています。歌も句も躍動人生も躍動の青春です！

<だっちゃん>

(1) 本日のしだれ桜を確認し円山野音へ向かう人あり

(2) 街中で「排斥」叫ぶ人かなし うちなるわれらの社会はかなし

俳句

(1) 春霞一群の変あられ雲

(2) 春霞並み板の穴思いだし

(3) 春霞側溝までは転がりぬ

<さわ女>

昔から弱者の側に断固として立ち続けていた、だっちゃんの姿が浮かびます。そうですね、とってもいい季節のたいせつな集い。叩かれ続けの政権。ことにスキャンダルまみれの中井某氏は拉致問題をことさら騒ぎ、民族差別、朝鮮人学校いじめで、人気取り。まっとうな人権・国際基準、国際社会から見れば恥ずかしい政策です。そんな状況を(1)ではしだれ桜に(2)では「うちなるわれらの社会はかなし」とうたう、だっちゃんの、哀しみと怒りを感じ、共感しています。だっちゃんは、句の長い経験があるのですよね。題詠の「変」でも歌ってくれています。3月26日に「あられ」でしたか。「あられ」も句にすると、まじめでおかしくて、楽しい句ですね。(1)が私は気に入っています。(3)もいいですね。「あられ」という、そういう具体的なものが句に弾みをつけていて鮮やかです。

私は歌から人生を知り、学び心を繋ぐ、そんな読み方です。歌そのものの感想にならなかつたりですが、どの歌にも前向きなみんなの呼吸が伝わってくるようです。圧倒されつつ、励まされつつますます元気な私です。一気呵成に、点滴後の夜に、以上記しました。

<さわ女>の題詠

- (1) 光集め春の^{へんげ}変化の桜花夜の独房幻と咲く
- (2) 変わらぬぞ動かないぞとふんばってついに流れる花筏行く
- (3) 自らを変えることなく世界など変ええぬと知る若き日のあり
- (4) 変革の期待と諦めせめぎあう日本を決める普天間の春
- (5) 革命の夢の軌道を辿りつつ抗癌剤の点滴五時間

次号11号の題詠は「望」といたします。希望、望郷などたくさん作品をお待ちしています。

【編集後記】4月30日から一週間、国連の核不拡散条約（NPT）再検討会議に向けての民間平和使節の一員として、アメリカ・ニューヨークへ行って来ました。その前に、この「さわさわ」11号を出したかったのですが、間に合わず、帰国してからも何やかやといろいろな用事に忙殺され、編集作業があと少しのところまで完成せず、遂に大幅に遅れてしまいました。会費を払って「さわさわ」の発行を待ってくださってる読者のみなさま、また原稿をお寄せくださったみなさまには大変ご迷惑をおかけいたしました。深くお詫びいたします／ニューヨーク行きは、沖縄からのピースウォーク受入れの際、日本から大勢行かれるという話を聞いて、ほくも行きたくなくて、草津市民代表団一行の皆さんに仲間入りさせてもらって行ってきました。国連前広場のイベントで「にんげんをかえせ」を歌うことができたのをはじめてたくさんの収穫がありました。／米澤鐵志さんは昨秋、私が住む大和高田で広島の被爆体験をお話いただきましたが、獄中の重信さんにいつも励ましのお手紙を出してくださっています。今回は「私の二十歳代」をお願いしました。／平沢武彦さん「獄中画の深層」は「救援」誌に載った文章を補筆していただき転載させていただきました。／表紙写真は今年1月東京日比谷公園での沖縄連帯集会後のデモの一コマです。／次回発行は8月に予定しています。投稿等、7月中にお願いいたします。



【さわさわ 11号】



2010年6月15日刊

販売は1冊300円です。

なるべく年間購読をお願いします。

送料込みで年会費は2000円です。

(郵便振替口座 00920-2169764

さわさわの会)

〒635-0061

大和高田市礪野東町3-27 森本忠紀

Tel/Fax 0745-22-4002

mail : toppinsyan@kpa.biglobe.ne.jp